

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：13103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370546

研究課題名(和文) 談話における焦点化構文の総合的研究 - 関連性理論, 認知言語学, 機能文法, による考察

研究課題名(英文) Studies on Focus Constructions in Discourse: Relevance-theoretic, Cognitive, and Functional Approach

研究代表者

加藤 雅啓 (Masahiro, Kato)

上越教育大学・学校教育研究科(研究院)・教授

研究者番号：00136623

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、文法による統語的な圧力に対して、話し手・聞き手・場面という語用論的要因からの要請が焦点化構文、その他の構文にどのように関わっているか、いわば文法と談話の接点の姿を明らかにした。本研究から得られた成果は、「取り消し可能性」を巡り、文法と談話は相互に依存関係にあることが明らかとなり、これまで談話とは無関係であると考えられていた他の統語構造についても、談話となんらかの接点を持つと想定できる。これにより自然言語の解明とコミュニケーションの成立場面での緻密でありながら、柔軟な言語運用研究に対して、新しい研究領域を切り開くという意味で、今後の言語研究の進展に大いに貢献すると思われる。

研究成果の概要(英文)：In this research, I have aimed to elucidate functional and pragmatic principles governing focus constructions in discourse in the framework of Relevance Theory, Cognitive Grammar, and Functional Grammar. Specific results of the researches are as follows:

1. After discussing inadequacies of previous literature on English cleft constructions, I have demonstrated that some of syntactic phenomena are basically controlled by nonsyntactic factors. In fact, I have exemplified that some examples of relativization and extraposition from subject are crucially governed by such a pragmatic factor as cancellability. 2. I have illustrated that those interpretations coded in syntax and semantically stipulated cannot be cancelled and thus categorized in grammar, and that those interpretations derived by pragmatic inferences can be cancelled, and thus categorized in pragmatics. 3. I have constructed a database of cleft constructions, relativization, extraposition from subject, and topic reference.

研究分野：英語学

キーワード：焦点化構文 談話 取り消し可能性 関連性理論 袋小路文 話題指示 保留指示 機能文法

### 1. 研究開始当初の背景

従来、文法と談話という2つの領域は互いに独立した領域と考えられているが、人間の言語運用の場面では、**文法による規制と談話からの要請**との軋轢が文法体系の再構築を迫る圧力となる事例も少なくない。本研究は文法と談話の多様な関わり合いの具体的事例として焦点化構文を取り上げ、文法による統語的制約に対して、話し手・聞き手・場面という語用論的要因からの要請がどのように関わっているか、いわば**文法と談話の接点**の姿を明らかにしようとする試みである。

### 2. 研究の目的

本研究は談話における日英語の**焦点化構文(focus construction)**に見られる認知的・語用論的特性を認知言語学、関連性理論、機能文法の観点から明らかにするものである。具体的には現代英語の**焦点化構文**、とくに英語の **it 分裂文**、**wh 分裂文**、**右方移動構文**、及び日本語の**八分裂文**、**ガ分裂文**の談話における意味特性と語用論的機能を考察し、焦点化構文に伴う総記的含意とその却下可能性について詳細に分析した上で、**談話における焦点化構文の語用論的解釈に関わる推論過程**を明らかにし、これに関わる**認知語用論的原理の解明**を目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究は、**[1]文献による理論研究**、**[2]言語資料の収集と分析**、**[3]談話における焦点化構文のデータベース作成と公開**、の三つの方法によって進められる。

#### [1]文献による理論研究

英語分裂文に関して、生成文法、関連性理論、認知言語学、機能文法のそれぞれの枠組みにおける先行研究を総括する。

**生成文法の観点**からは、「移動に課される統語的制約」の観点から、英語分裂文の研究は文レベルにおける分析だけでは不十分であることを検討する。さらに中島(1995)の「**主語からの外置については統語論と語用論の棲み分けが必要である**」という分析に注目し、統語論と語用論がどのように役割を分担しているか明らかにする。この際、文文法と談話文法のインターフェースとして関連性理論の理論的背景を Carston(2002)に基づいて検討する。

**関連性理論の観点**からは、英語分裂文が果たす談話機能について、聞き手の想定形成にどのような影響を及ぼすか「**最適の関連性原理**との関わりを検討し、先行文脈との意味的つながり、もたらされる**認知効果**、及び**処理努力**との関連性を探り、想定から導かれる論理形式と語用論的推論との関係を明らかにし、英語分裂文の解釈に関する**推論メカニズム**を検討する。

**認知言語学の観点**からは、**メトニミー**による語義の拡張、**パートニミー・トポニミー**と英語分裂文との関係を検討し、**参照点**

**構造**(Langacker, 1993)を明かにし、メトニミー的認知プロセス、及びメトニミー的推論の観点から、英語分裂文に関わる**認知メカニズム**を考察する。

**機能文法の観点**からは、英語分裂文がもたらす談話機能について詳細に検討していく。Rochemont (1978)、Rochemont & Culicover (1990)らの「**後置要素の焦点化**」説、Hawkins (1994)の「**統語的置量**」説、及び談話における情報構造の観点から高見(1995)の「**情報の重要度**」説を取り上げて、これらの分析の妥当性を検証する。

これらの理論研究に基づく分析結果を総合的に検討し、英語分裂文が持つ談話機能の本質的な特性とその存在意義を明らかにし、談話における it 分裂文、wh 分裂文の認知プロセスと推論メカニズムの全容を総合的にとらえ、**推論過程**とその**認知語用論的原理**を明示的に解明する。

#### [2]言語資料の収集と分析

言語資料の収集は (1)英字新聞、英文雑誌、英米文学作品、*Los Angeles Times*, *Washington Post*, *New York Times*, *Daily Yomiuri*、英文雑誌 (*National Geographic*, *New Yorker*, *Time*)、(2)電子コーパス Brown Corpus, Lund Corpus, LOB Corpus, British National Corpus, WordSmith Ver.3, Michigan Text Corpus, 及びインターネット上の言語資料集、英米文学作品に関するアーカイブを運営する Project Gutenberg (<http://gutenberg.net/>)から収集する。

#### [3]it 分裂文、wh 分裂文に関わるデータベース作成・公開

[2]によって収集した英語分裂文の用例はデータベースソフトを用いて分類・整理し、キーワード検索処理をした上で**データベース**を作成し、上越教育大学 WWW サーバー (<http://www.juen.ac.jp/>)上で運用し、一般に公開し、内外の研究者の便宜を図る。

### 4. 研究成果

本研究の主たる研究成果は、文法による統語的制約に対して、話し手・聞き手・場面という語用論的要因からの要請がどのように関わっているか、いわば**文法と談話の接点**の姿を明らかにしようとしたことである。

(1) 代名詞の指示機能として話題指示 (topic reference) と保留指示 (suspended reference) を取り上げ、指示付与には談話の話題 (discourse topic) が密接に関与していることを指摘し、代名詞については、文のレベル、談話における文の機能のレベル、及び発話解釈のレベルのそれぞれのレベルで指示付与に関わる規則や原則が必要であることを明らかにし、代名詞の指示付与に関わる文文法、機能文法、及び語用論の棲み分けについて明らかにした。

(2) 文の解釈に関して、統語的にコード化され、意味論的に規定された解釈と推論により語用論的に導かれた解釈について、意味

解釈に関わる手続きを検討した。その際、(i) 当該の事象が文法領域と語用論領域のどちらの領域に属するのか、(ii) 関係詞化と話題、(iii) 主語からの外置と語用論的条件等の問題について、コード化された意味と推論による意味の棲み分け、すなわち統語論と語用論の棲み分けについて、解釈の「取り消し可能性(cancelability)」を判断基準としてこれらの課題を分析し、その妥当性を明らかにした。

(3) 曖昧性を含む文の解釈に関して、統語的にコード化され、意味論的に規定された解釈と推論により語用論的に導かれた解釈について、袋小路文(garden-path sentence)における再分析(reanalysis)の手続きと、語用論における「取り消し可能性(cancelability)」がどのように関わっているかということについて検討した。その際、即時性の原則(immediacy principle)、暫定付加方略(Tentative Attachment Strategy)等の方略が密接に関与していることを明らかにした。

(4) Yule (1998)の心的距離 (remoteness) と事実性 (factuality) という枠組みを拠り所にし、私たちが物事をどのように認識しているかということを示す上で、時制の選択に関わる事象を小説、コミック、新聞記事などから実例を取り上げて明らかにした。

従来、文法領域内の意味論的解釈、あるいは語用論領域における推論的解釈という個々の領域における研究は行われてきたが、上記 (1)-(3)の研究成果は、発話解釈における統語論及び意味論と語用論の棲み分けについて、文法領域内の解釈と語用論領域の解釈を横断的に論じたものであり、この点において国内外を問わず、先進的な試みであると位置づけすることができる。

本研究から得られた成果によって、文法と談話は相互に依存関係にあることを示すことにより、これまで談話とは無関係であると考えられていた他の統語構造についても、談話となんらかの接点を持つことが予想される。これにより自然言語の解明とコミュニケーションの成立場面での緻密でありながら、柔軟な言語運用研究に対して、新しい研究領域を切り開くという意味で、本研究は 28 年度基盤研究(C)「談話における焦点化構文の総合的研究—統語論と語用論の棲み分けに関する考察」に繋がる研究であり、今後の言語研究の進展に大いに貢献することが期待される研究と位置付けることができると思われる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

(1) 加藤雅啓「袋小路文の再分析と取り消し可能性について(1)」上越教育大学研究紀要第 35 巻, pp. 157-165, 平成 28 年(2016) 3

月、査読無し

[https://juen.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_action\\_common\\_download&item\\_id=7131&item\\_no=1&attribute\\_id=22&file\\_no=1](https://juen.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=7131&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1)

(2) 加藤雅啓「「取り消し可能性」をめぐる議論について」上越教育大学研究紀要第34巻, pp.119-130、平成27年(2015) 3月、査読無し

[https://juen.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_action\\_common\\_download&item\\_id=6846&item\\_no=1&attribute\\_id=22&file\\_no=1](https://juen.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=6846&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1)

(3) 加藤雅啓「談話における照応表現の指示機能—話題指示、保留指示—」上越教育大学研究紀要第 33 巻, pp. 157-166、平成 26 年(2014) 2 月、査読無し

[https://juen.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_action\\_common\\_download&item\\_id=6486&item\\_no=1&attribute\\_id=22&file\\_no=1](https://juen.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=6486&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 3 件)

(1) 加藤雅啓「時制の選択：心的距離と事実性」記念論集編集委員会『中島平三教授退職記念論集』(印刷中)、開拓社、査読有り(平成29年3月出版予定)

(2) 加藤雅啓「コード化された意味と推論による意味—統語論と語用論の棲み分け—」記念論文集編集委員会『言語研究の視座—坪本篤郎教授退職記念論文集』, pp. 77-92、平成27年(2015)3月、開拓社、査読有り

(3) 加藤雅啓「談話における代名詞の指示機能-話題指示と保留指示-：機能文法理論と認知語用論の棲み分け」『言語学からの眺望 2013』福岡言語学会40周年記念論文集, pp. 28-40、平成25年(2013)12月、九州大学出版会、査読有り

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：

取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤雅啓 (KATO, Masahiro)  
上越教育大学・大学院学校教育研究科・  
教授

研究者番号：00136623

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：